

不思議の国のルベル

敦賀市立敦賀北小学校

六年

西	安	廣	河	植
にし	やす	ひろ	かわ	うえ
森	田	田	瀬	本
もり	だ	た	せ	もと
日	優	有	夏	涼
ひ	ゆう	ゆう	か	すず
な	か	き	な	か
子	花	紀	菜	花
こ	か	き	な	か



各務原市立陵南小学校

六年

山	廣	小
やま	ひろ	こ
田	江	林
だ	え	ばやし
有	志	義
あ	し	よし
倭	保	明
い	ほ	あき

フワフワのキラキラ、スイーツにウサギさん、メルヘンチックな不思議な国に迷い込む私。アリス……、あなたは、特別な存在、手が届かないほど……。あこがれ、アリス。

ルベルは、平凡な高校二年生。ドレッサーの前で身支度を整えながら、鏡に映る自分をのぞき込んだ。サラサラのブロンド、すらっとした手足、かわいらしい小さな口、高い鼻、まつ毛が長くて、深いグリーンの大きな瞳。童話に出てくるアリスそっくり、いや、そのもの。

「ルベル、八時半よー、遅刻するわよー」
と、ママが台所で大声で呼んでいる。

「えっ！ 八時半！」
と、時計を見た。

でもルベルの部屋にある時計は、七時半を指している。腕時計は、九時だし、ケイタイは、六時五十九分。いったい何時なの？

結局、自分の部屋の時計に合わせて、学校に行くことにした。階段を降りようとすると、なぜか、銀の時計を持った小さな子どもがいて、手招きをしている。その子どもの手から何か光るものが落ちた。

「時計だ」

それは、八時四十五分を指していた。時計を返そうと顔を上げると、もうそこに子ども姿はなかった。

「あれえー？ どこに行ったんだろう」

今度、あの子が現れたら渡すことにしよう。

時計の針はもう九時を指している。ギャー遅刻、全力で走った。

学校についたのは九時十八分で、学校の時計と拾った時計は時間が同じだった。時計の裏には、「ルーク・シャープット」と名前が書いてある。

「これはお守りとして持っておこう」

でも、この時計のせいで、事件に巻き込まれることになるとは……。

ルベルは、体育館倉庫が一番お気に入りの場所。今日も、時計を握り締め、泣きながら体育館倉庫にうずくまっていた。アリスのいるメルヘンチックな世界とは程遠い。顔はそっくりなのに……。アリスと入れ替わりたい。学校なんかきらいだ。

ルベルは、いつも山田汐音たちにいじめられていた。もうイジメなんか嫌。助けて！ ルベルが時計を力強く握り締めたその時、またあの子どもが現れて手招きをした。

「待ってー」

すると子どもがこちらを振り向いた。

「あなたは誰？」

「私は、不思議の国のルイージュ。アリス、アリス、ルベルよルベル」

とルイージュが言うと、体育館倉庫の奥から扉が出てきた。そして、その前にルベルそっくりな女の子が座っていた。まるで鏡を見ているよう。その女の子

が言った。

「私、不思議の国から来たアリスよ。あなたは、ルベルでしょ。私はいつもあなたのことをここで見ていたの。私と入れ替わりたいんでしょ」

「えっ？」

「だって、私達、身長も顔もすべて同じなのよ。私、あなたのクラスの上村海人が好きなの。あと、パニエすがたのロリータファッションあきちゃった。今の時代は、ギャルよ、ギャル」

ルベルは口をぽかんとさせた。アリスは、パニエすがたが普通なのに、ギャル？ 似合うわけないじゃんと思ったのだ。それに、実はルベルも上村海人のことがずっと好きだったのだ。だから海人がアリスにとられると思うと、すぐには、

「うん」

とは言えなかった。

「いいでしょ」

とアリスは、せまってくる。ルベルは、

「もし入れ替わったことがばれたらどうするの？」

「いいから、いいから」

と強引にルベルの制服と自分のドレスを替え、もうアリスは、ルベルを演じ始めている。そして、ルベルを不思議の国の扉の中に突き飛ばし、扉をすばやく閉めて、ルベルが出られないように鍵をかけた。ルベルは、意識がだんだんうすくなっていき……。

どれくらいの間がたったのだろうか。ルベルは目を覚ました。すると扉の向こうからアリスが言った。

「ルベル、あんたは、私にだまされたのよ。私がちやーんとあんたになりすましてあげるわよ。オーホホホホ。この扉には鍵をかけたから、あんたは一生不思議の国にいなさい。海人は、私の彼氏にしちやおうかな？ 魔法で」

「開けてえ、ここから出してえ」

と叫び、ルベルは扉をひたすら叩いた。

アリスは、フワフワでスイーツのようなやさしいイメージだったのに、あんなに意地悪で強引だったことには驚いた。魔法なら海人もアリスの彼氏になっちゃやし、何でもできるのね……。扉が開かないのなら、不思議の国で暮らすしかない。アリスのフリをして暮らすのは不安だったが、今まで憧れだったアリスになれてちよっぴりうれしくもあった。もういじめられない。私はもうアリス。ああ、海人、アリスの魔法にかからないといいけどなあ。私とアリスが入れ替わったことがばれたらどうしよう。ああ、全てはあの時計を拾ったせい……、ルベルは、ため息をついた。

一方、人間界にいるアリスは、魔法の鏡でこのルベルの様子を見ながら、口を三日月の形にして笑っていた。ルベルは、自分の様子を見られていることも知らず悩んでいた。ああ、どうしよう。

いつのまにか、ルイーージュも消え、ルベルは森の中にいた。

そこには、「ダイヤモンド・キャッスル城、この先まっすぐ」と書かれた看板があった。ルベルが看板どおりにどンドン進んでいくと、ダイヤモンドがびっしりちりばめられた、まさにゴージャスなお城があった。

「何なの、このお城」

「ここは、女王が住んでるお城だよ」

ふり向くと、消えたはずのルイーージュがいた。

「さあ、一緒にお城の中に入ろう」

と、ルイーージュは、ルベルの手をとって城の中へと入っていった。ダイヤモンド・キャッスル城は、中もダイヤモンドでいっぱいだった。ルベルは「黒の女王」と書いてある扉を開けてみた。

「あんた誰よ。あつ、アリスじゃないの」

そこには、どす黒い服を着た女王がいた。

ルベルは、おどろいて時計を落とした。

「今、何を落とした？」

「女王様の時計でございます」

と、ルイージュがさつと口を挟んだ。

「えっ、女王？」

時計のうらには、ルーク・シャープットと書いてあったはずなのに。

「私が、そのルーク・シャープットだ」

なんと、ルーク・シャープットとは、黒の女王のことだったのか。

突然、女王が私を真っ黒い闇の世界、バーチャルワールドへ放り込んだ。こ

れからどうなるのお。

「いたたた」

まさか時計が女王の物だったなんて。ルベルは真っ暗な空を見上げた。

「きみが悪いわ」

「やあ、君は、ルベルだね」

「……あの、えつと」

「ああ、僕の名前は、クリスタル。よろしくね」

ルベルの目の前に、おかつぱ頭のかわいらしいの男の子が立っていた。深緑の目で、そばかすがいっぱいある。

「かわいい」

ルベルがクリスタルに飛びついたので、クリスタルはほほを真っ赤にした。

「ここは、道や草、木などからダイヤモンドが自然にわき出てくるから、ダイヤモンド・キャッスルというんだよ」

「へえっ」

ルベルは、クリスタルについていった。

そしてダイヤモンド・キャッスル城に着くと、クリスタルはくるりと回って、きらきらと光りながら魔法のように消えていった。

突然ルベルの前に、耳がすつと長く、目がすぐ真ん丸くて、でっかくて、白色のきれいなうさぎが現れ、走り出した。ルベルが追いかけると、うさぎは二本のピンクの木の前で立ち止まった。その木の間には、うさぎしか入れないようなかわいらしいドアがあつて、うさぎはいつの間にか姿を消していた。

(どうしたらドアの向こうにいけるのかな)

ドアの左の木の枝にひもを見つけ、ルベルはそのひもを引っ張ってみた。小さなドアが開いたので、しゃがんでくぐろうとしたが、小さすぎて入らなかつた。はあつとため息をついた時、目の前にきれいな透明の箱がおいてあるのに気がついた。その箱を開けてみると、小さいビンが入っていて、ラベルには、ビンの液体を目にたらしめている絵が描いてあつた。

「目薬みたいに、やればいいのかな」

ルベルは、絵の通りに目に液体をたらした。

その瞬間、ルベルの体がどンドンどンドン縮まった。ルベルは、小さくなつ

た自分の体を見て喜んでねた。

「やったあ」

そして、ちよつとどきどきしながらドアをくぐった。

そこでルベルが見たのは、いつもの世界とは全く逆の世界だった。いろいろな色のでっかいきのこや見たことのないかわいらしい生き物たちが、いっぱいいて、心臓が何回もぼくぼくした。てんとう虫や蝶々が、ルベルと同じくらい大きく、さっきのうさぎはルベルよりも大きかった。お花の雨、風船の上の小人。ああ、これこそ私のあこがれの夢の世界。お菓子の家には、ドアにこんな言葉が書いてあった。

『鍵は本当に心の優しい者が持ち主……』

今鍵を持っているのは、意地悪で強引なアリス。ドアをたたくと優しそうなおばあさんが出てきた。ところが、おばあさんは見る見るうちにキラキラと星屑になり、消えてしまった。足元に紙が一枚落ちていた。

『キラキラ魔法は、アリスの魔法』

「何これ？ よくわからないけど持っていこう」

ルベルは再びダイヤモンド・キャッスル城にたどり着いた。ギギイーと扉を開けると、たくさんのおもちやの兵隊が私をにらんだ。

「よく来てくれましたあ。アリスのそっくりさん。早く入りなさい。ホーツホ
ホホホホ」

「もしかしてその声は、黒の女王！」

ルベルは勇気を出して中に入った。

「そうよ。そしてルイージュは、私の息子よ」

「うっそう〜！ あんなに優しくしてくれたルイージュが女王の息子？」

「あなたの周りの兵隊をよく見てみなさい」

兵隊の顔を一人ずつ見ると、学校みんなだった。海人も、ルイージュもいる！ みんな、魔法で操られたのね……。

『キラキラ魔法は、アリスの魔法』

ルベルは、大声で言ってみた。

「なぜ？ なぜ、あなたはこのじゅ文を知ってるの？ このじゅ文は、昔のあたしに……」

すると女王と兵隊はキラキラと星になり、元の姿になった。女王はアリスに！心の優しい者が持ち主って、つまりアリスのことだったのね。

「ありがとう、ルベル。この鍵であっちの世界に戻ってね」

魔法がとけて元の姿になったアリスが言うと、目の前に大きな扉が出てきた。扉を鍵で開けると、キラキラキラと元の世界が見えた。

「今までごめんな」

海人やみんなが笑っている。

「また会おう。そして今度は……」

とルイーヂュが言いかけたたん、扉の向こうの空がたちまち暗闇になった。

「早く、早く戻るんだ」

不思議の国の扉がボタン。鍵がカチャリ。

―もとの教室に戻った。

ルベルには友達ができて、あの暗闇のことなど一ヶ月もたたないうちに忘れてしまった。

それから十年後……。

大人になったルベルはOLになり、いつものように家に帰った。

「カチャ……」

郵便ポストに何かが来た。

「真っ黒い封筒……何？　これ……」★

封筒を開けて読んでみると、そこには、

「アリスのそっくりさん、今、アリスとルイージュは、私があずかっている。もし、助けなければ、私の時計を持って、初めてこの国に来た時の扉を使って来い。ただし、今週中に来ないと二人の命はないぞ。」

黒の女王」

アリス？ ルイージュ？ ルベルは、高校の時を思い出してみた。そのうち、はっ……と思い出した。私がアリスと入れ替わった時のことだ。この手紙は脅迫状ってことだ、きつと。アリスにルイージュ、あの二人が黒の女王にかまっているなんて。仕事なんて今はどうでもいい。二人を助けたい。明日すぐに行こう。ルベルは、黒の女王の手紙にあった時計を探し始めた。

時計はどこにあったかな。確か、ドレッサーの引き出しの宝箱の中にあつたはず。宝箱を開けて見ると、確かに時計が入っていたが、そこには、鍵も入っていた。鍵を持って行こうか迷ったが、両方持って行くことにした。

次の日、ルベルはさっそく高校の体育館倉庫に行ってみた。すると、黒の女王の手下の兵隊が二人、扉の前で立っていた。

二人の兵隊は、ルベルに「ここに入れ」と無言で指図していた。ルベルは扉の中へ入った。扉の中に入ると、ルベルはまたあの時のように意識がうすれていった。目を覚ますと、不思議の国は初めて来た時よりもとてもはなやかだった。ルベルは驚き、目をみはった。木々の花は色とりどりで黒の女王のいるダイヤモンド・キャッスル城のダイヤモンドはさらに輝きを増していた。ルベルは、はっと我にかえると、

「おどろいている場合じゃなかった。早く、アリスとルイージュを助けに行かなくちゃ。この国、お城までが遠い。というより道が迷路になってる？ これも黒の女王のしわざかも。これからどうすれば……」

とにかく、私は二人を助けたいんだ。しばらく考えて進むことを決意した。

ルベルは、迷路の道を少し進んで、最初の分かれ道を右に曲がった。すると、そこには、七色に輝いたダイヤモンドの宝石に包まれた時計があった。その時、突然持つてきた鍵が金色に光った。

「この鍵には、不思議な力があるのかも」

時計にふれてみると、いきなりはりがぐるりと回り、ある道を指した。その道を進んでみると、いきなりトランプ達が現れ、追いかけてきた。ルベルはひたすらにげ続けた。そのうち、トランプは追ってこなくなった。

「やつとトランプからにげきれたんだ。……よかったあ……」

そうつぶやいたとき、いきなり、

「があははは……」

と、低い声がひびいた。その声のする方へ行ってみると、ダイヤモンドのかたいおりが空にうかび、その中に、アリスとルイーージュがつかまっていた。

しかし、声の主の姿はなかった。

「さあ、時計は持ってきたんだろうな」

言われて、時計をさし出そうと、ポケットに手を入れると、また鍵が七色に光った。その光は、一点に向かってまっすぐのび、その先に黒の女王がいた。

「ううっ」

その光が当たると、黒の女王はしばらく苦しみ、その後、別人のように優しい表情に変わった。

「きつとこの鍵には、人を優しくする力があるんだわ」

ルベルがそう思った瞬間、あらあらしい風が吹き、さっきのように、また低い声がした。

「お前はまんまとだまされたな。このままではつまらない。今度は、私のところまで十二時間以内に来なければ、アリスとルイーージュをしまつしてやる。その時を楽しみにしているんだな。ハーツハツハ」

その声とともに空から何かが落ちてきた。鏡とほうきだった。

「ああ、私、もうどうしよう。どうすれば……」

ルベルは迷った。しかし、すぐに、

「迷っていても仕方ない。とにかく行こう」

ルベルはほうきに乗った。すると、ほうきはすごい速さでダイヤモンド・キャッスル城に向かった。五分後、ルベルは、ダイヤモンド・キャッスル城に着いた。中に入ると、つかまったアリスとルイーージュが、おりの中にいた。

「黒の女王、二人を返して」

ルベルが言うと、おりの前から声がした。

「よく、苦難を乗り越え、ここまで来ましたね」

黒の女王だった。さつき見せた、あの優しい表情になっていた。

「なんでそんなに優しくなったの」

ルベルがびっくりして聞くと、黒の女王は答えた。

「あれは、おしぼいです。そなたの勇気と、友を大切に思う心をためしたので

す」

そして、アリスとルイージュの方を向き、

「アリス、ルイージュ、この国のことをたのみますよ」

と言った。二人は、びっくりした顔で返事をした。そして、また、黒の女王は、ルベルを見て言った。

「この国と、二人に何かあった時は、助けてあげてほしい」

「は、はいっ」

ルベルは、大きな声で返事をした。

「鍵は失くさず、持っているがいい。それがないと、こちらの国に来ることができなくなるのです」

黒の女王の言葉に、ルベルは、鍵をにぎりしめながらうなずいた。

ルベルは、アリス達にまた来ることを約束して、元の世界に帰った。

「また次にあの国に行く時は、どうなっているかな」

そんなことを考えながら、ルベルは、軽い足取りで家に向かった。